

「清明上河図」から読み解く唐宋変革

青山学院大学教授

青木 敦

はじめに

今年1月2日より東京上野の東京国立博物館で開催された「北京故宫博物院200選」において、中国北京図書館蔵の「清明上河図」が公開された。北宋末に張昞端なる人物が描いた都市の風俗画で、開封がモデルと言われている。この「清明」とは、清明節（二十四節気の一つ、新暦四月初ごろ）を指すとされており、確かに図の右には清明節に行われる墓掃除の景色もあるが、地名の可能性も捨てきれない。「上河」とは河縁に集まって行くことだろう。⁽¹⁾

ところで「清明上河図」と言えば、北京故宫博物院のこの一本を指すのではない。北宋の原作を題材として、明清時代に多くの「清明上河図」が描かれた。そこには、河や橋などのモチーフはそのままだ、蹴鞠や拵抵伎（すもう）など、オリジナルにはないさまざまな題材が書き込まれている⁽²⁾。この北京の北宋の作品、および同じ題材を用いた世界に40以上ある明清絵画の総体が「清明上河図」なのである。だが中でもこの北京の北宋作品は、オリジナルとして奇跡的に現代に生き延びた、もっとも貴重な「清明上河図」と言えるし、これ以外にも、台北故宫博物院蔵の乾隆元年（1736年）の画院画家の合作によるものは、出来栄としては最高のものとされている⁽³⁾。

北京蔵の現物はすでに赤茶けているが、1958年に初めてその写真版が刊行されてから、多くの研究がこれについて行われてきた。筆者が確認しただけでも、もっぱら「清明上河図」を扱う図版や研究書は30を下らないし、日本語・中国語論文は80本は出ている。英語・フランス語の論文も数編ある。ことに「清明上河図」に関する論文を再録して一冊にまとめた『《清明上河図》研究文献滙編』（遼寧省博物館編、万卷出版公司、2007）を繙けば、「収蔵と版本」、「総合鑑賞」、「清明上河図」命名について」、「経済史」、「地志学」、「医学史」、「科学技術史」、「虹橋」について、「補全巻」関連の報道と評論、

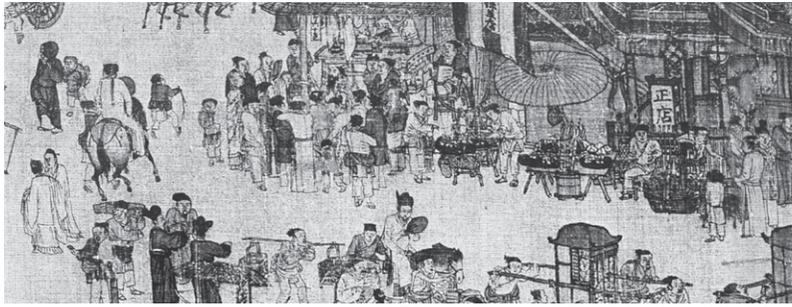
「張昞端と金明池争標図」の各分類に、総計ちょうど100編もの論文が一冊に復刻して納められており、まさに汗牛充棟といったところだ。本稿では、これらの諸研究の力を借りつつ、この「清明上河図」からうかがい知ることのできる、唐宋変革の諸側面、ことに「経済革命」と言われる宋代における市場化、都市化について、これまでの研究を振り返ってみたいと思う。

1. 「清明上河図」の由来と現状

史料上、宋代に張昞端やこの絵の存在を記した記録はない⁽⁴⁾。ただ絵の終わりには、金の大定丙午（1186年）に記した張著の次のような跋（説明書き）が記されており、これが文字として得られる情報のほぼ全てである。

翰林張昞端、字は正道、東武人なり。幼くして書を読み、京師に遊学し後に繪事を習う。本と其の界画〔定規を用いた作画〕を工にし、舟車・市橋・郭経を嗜み別に家數を成すなり。按ずるに、『向氏評論図畫記』云うらく、「西湖争標図」「清明上河図」、神品に選入し、藏するものは宜く之れを寶すべし、と。大定丙午、清明の後一日、燕山・張著跋⁽⁵⁾。

ここからは、作者である張昞端が画才により翰林待詔（宮廷画家）となったこと、『向氏評論図畫記』なる画書（現存していない）の中で、張昞端作の「西湖争標図」と「清明上河図」の2作が神品、すなわち最高傑作に分類されている、という程度しか分からない。彼の「金明池争標図」は現在、天津芸術博物館に所蔵されているが、こちらは「清明上河図」ほど知られてはいない。しかし、この跋文を書いたのが、金の張著という人物だったという事実が、多くを物語る。北宋の景色を描いた張昞端の絵は、北宋末、徽宗・欽宗らとともに、靖康の変で金に持ち去られたのであろう。跋が書かれた1186年と言えば南宋で朱熹や陸九淵が活躍していた時代だが、この有名な宋代絵画も、当時は宋朝の手中には



(提供) ユニフォトプレスインターナショナル

なかったことになる。それが幾多の戦火をくぐり抜けて今日北京に伝わったのは奇跡に近い。

2. 描かれたモノ・人

さて、この「清明上河図」には実にさまざまなものが描き込まれている。川、船、橋、門、レストラン、大規模居酒屋、一杯飲み屋、屋台、牛、ラバ、犬らしきもの。登場する人間は老若男女、約770余人にのぼる⁽⁶⁾。教科書⁽⁷⁾に載せられた商店街と人通り(上図)は、そのもっとも華やかな部分のひとつである。日本の「年中行事絵巻」に「洛中洛外図屏風」と比べても、ここに見られる多くの商店と人、軒を並べる2階建ての居酒屋、運河の大型船などの経済力は圧倒的であり、人口100万を超える当時の世界最大の都市の熱気を十分に伝えている。

構図としては全体として右に郊外、中央に河と橋、左に市街が配置されており、ことに、中心に描かれたアーチ状の立派な橋とそこに群がる人々が、この壮大な絵画をまとめ上げている。教科書掲載部分は中央よりやや左に当たる。この構造の橋は一般的に当時「虹橋」と称され、開封には数か所あったと思われる。門は楼門といって、首都開封の城門である。一方、描かれていないものもある。それは都市にはつきものの、見苦しいものだ。そもそもこの絵は、皇帝にご覧いただくために描かれたものだから、その手のものが省かれていることは、言うまでもない。また、郊外が右の方に多少描かれてはいるが、農村は描かれていない。女性も非常に少ない。日本の「年中行事絵巻」に生きいきとした女性がこれより多い割合で描かれていると比較すると、男性が多く、「清明上河図」は男性中心の絵であるということも言える⁽⁸⁾。もっとも教科書に載せられた部分にも見えるように、乗客の見えない轎(人夫がかつぐ籠)があり、その中は女性だったと思われるから、女性は隠れた存在として表現されたのだろう。さら

に、遊興船があるにもかかわらず、中が無人であったり、屋台やレストランをよく見てみると、客は多くてもテーブルに食べ物があったく乗っていない、といった不気味さもしばしば指摘される。生命感という点からすると、どこか不思議だ。しかし、世界最大の都市にふさわしい、最大規模の都市絵画であることは間違いない。

3. 網運と宋代経済

こうした中で、絵画の約三分の一を占めているのが、河と船である。この絵が開封だとすれば、間違いなくこの河は汴河である⁽⁹⁾。そして船には、遊興船とともに、荷を積んだ輸送船、そしてそれを一生懸命曳く人足たちが見られる(下図)。絵の中心にある、橋、河、船。そして城門や酒楼。これらは当時の流通・消費経済の象徴でもある。

最近20年ほどで英語圏、台湾においても Tang-Sung Transition として広く受け入れられる、唐宋変革論については、改めて説明するまでもあるまい。そしてそれは、市場化と非常に密接な関係にある。殿試の先駆けは唐末に生まれていたが、宋初から本格的に運用され、科挙官僚による文臣官僚制が貴族制に取って代わった。所謂「宗族三点セット」(族譜・族産・祠廟)を具えた近代宗族が、朝鮮やベトナム、台湾に先駆けて、中国で一般に浸透し始めた。南宋には、その後20世紀まで東アジアの儒教の柱

となった朱子学が生まれた。これらの諸変化を支えた重要な技術として、木版印刷と紙の普及を想定することができる。科挙の教科書、一族が共有する族譜、学派形成に不可欠な思想家の文集などが、宋代以降、広く出版されるようになった。しかし、その根本には、唐後半から宋代に至る、本格的な市場経済の発展がある。紙も出版物も、それを行き渡らせる市場なくしては、一般化しない。紙や出版物のみならず、均田制の崩壊とともに生産要素（土地・労働）の配分も市場にゆだねられるようになった。⁽¹⁰⁾ 宋代には主食である米の広域市場が形成され、「江蘇熟すれば天下足る」と言われるように、人々の生活は市場に依存するようになった。そして、食料や物産などの市場取引を可能にしたのが、運河を含めた漕運（水運）である⁽¹¹⁾。

隋の煬帝はその重要性を見越して先見的に、南北の運河を整備し、その中心となるのが、「清明上河図」の舞台であろう汴河である。しかし唐の支配がゆるむと、8世紀から、節度使に運河の支配権を奪われた長安ベースの唐朝は、江南の富から切り離されて滅亡してしまう。その過程で、綱運（行政的な運輸。綱は船の荷物の単位を表す）に責任を持つ発運使、転運使などの重要職を乱発して運河の支配権を繋ぎとどめようとするが、この転運使などの管轄範囲が、宋代には広域行政区画として発達し、福建省、湖南省など「省」の源流となる（宋代には路と言ったが、金が尚書省の、元が中書省の出先機関を置いたため、省となる）⁽¹²⁾。その後は、宋、明、清などは、各所に藩鎮が割拠し流通を分断された唐の失敗を繰り返さなかったが、それは科挙による皇帝独裁の確立と表裏をなす現象である。ともかく、唐末以降は汴河の確保こそが喫緊の課題であって、五代の後梁、後晋、後漢、後周は、みな汴河の華北側のターミナルである開封を都とした。宋代はそれを受け継いで、開封に都を置いたのである。

おわりに

「清明上河図」には船も、綱運を担う人夫たちも描き込まれており、そのディテールには、数多の興味深いトピックが含まれている。この教科書に表された人が行き交う商店街は、市場化の象徴でもある。だが明清のものを含めた「清明上河図」に共通するモチーフである河、船、橋そのものが、唐宋変革の政治的側面を表しているとも言える。この汴河の水

際に国都を置き、漕運を通じて巨大市場を維持し、華々しい唐宋変革を展開させた宋朝を、この絵は、無言のうちに描ききっているのである。

-
- (1) 趙廣超『筆記清明上河図』（台北：三聯書店，2004）。
 - (2) 板倉聖哲「その後の『清明上河図』」（伊原弘編『『清明上河図』をよむ』東京：勉誠出版，2003）。
 - (3) 実教出版の教科書に載せられた写真は、北京のもの。
 - (4) 今日では、宋元以前の文字史料の大半を納める「四庫全書」の全文、そこには含まれない宋代の基本史料である『宋会要輯稿』などのデータベースが、多くの大学にあり、東京駒込の東洋文庫から、台湾の中央研究院のデータベースに直接アクセスでき、史料の横断的な検索が可能になっている。だがこうした諸史料をチェックしても、張栻端に関する同時代的な有意な記述はない。
 - (5) 明代の趙琦美『趙氏鉄網珊瑚』巻11「張翰林清明上河図」、張丑『清河書畫舫』巻1「張正道清明上河図」にも再録されている。
 - (6) 「清明上河図」研究の日本語入門書として、『『清明上河図』をよむ』（アジア遊学，No.11，東京：勉誠出版，1999）、伊原編前掲書、久保田和男『宋代開封の研究』（東京：汲古書院，2007）を挙げたい。
 - (7) 実教出版「世界史A」（2013年度用新刊）
 - (8) 黒田日出男「絵画史料としての『清明上河図』—日本史からの読み方」（伊原編前掲書）。
 - (9) 汴河は現存しておらず、その河道の詳細や河流の方向は、いまだに未解決である。古典的著作として青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』（吉川弘文館，1963）がある。
 - (10) 青木敦「ポスト・ワルラスからのアプローチ—要素賦存・労働力配分・時代区分論」（宋代史研究会編『宋代の規範と習俗』東京：汲古書院，1995）
 - (11) 以下、綱運に関しては関連研究が多いので、青山定雄、斯波義信、William Skinnerの名を挙げるにとどめる。
 - (12) 青木敦「13世紀華北における地方行政の崩壊と誕生」『平成16～平成18年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書・近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク（研究代表者：桃木至朗）』（2007）